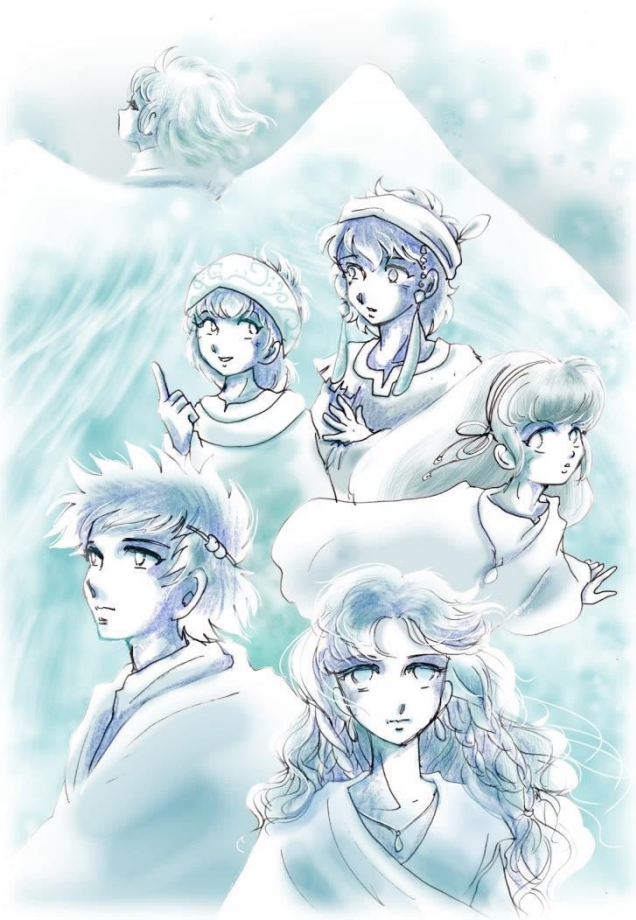
風の末裔シリーズ・5th シーズンの1

～六連星・Ⅰ（むつらほし）～



©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

～ヤン～

抜けるように青い空に、鳶(とび)が円を描いている。

「いいなあ、鳶は」

初夏の三峰の岩尾根で、スラリと手足の長い少年が、空を見上げて呟いた。赤毛っぽい黒髪に鮮やかな絹織りのバンダナ、それに一本の羽根飾りが立っている。あの日出逢った子供に貰った、緋(あか)い羽根。

「あれ？」

白い筋雲が不自然に揺れて、空に水滴を落としたような波紋が広がった。

「な、何?!」

「ヤンー!!」

尾根の下から狩猟の出で立ちの男が叫んだ。

「呆けてるんじゃない！　鹿はどっちへ行った！」

「あ、えと…」

少年は慌てて谷を見渡す。自慢の視力が灌木の僅かな揺れを見止める。指を輪にして口にくわえた。

――ヒュ――ピピピピ――

指笛の音色と長さで、獲物の居場所を谷の仲間に知らせる。

目のいい自分の役割だ。
もう一度空を見上げると、さっきの波紋は消えていた。
「目の錯覚？　まさか、僕が？」

大きな獲物を担いで、男達が部落に帰還する。出迎えの女達が労い、獲物を分配する。若者が極端に少ない。ヤンが幼児の頃流行った疫病で、同年代の子供が根こそぎ失われたからだ。
「ね！　イフルート隊長！　ねえったら！」
男達の中心の、鷲羽飾りの逞しい男にやっと辿り着いた。
「今日の牡鹿の角は僕が貰う番だ。この間約束してくれたでしょう？」
「ああ、ヤン、今日はよくやった」
イフルートと呼ばれた男は、理知的な瞳を向けて少年に笑い掛けた。
「しかし、ずっと追い続けていたあの牡鹿が『たまたま』今日仕留められたのは、『偶然』かい？」
「……」
「まあ、約束は約束だ。角を手に入れてどうする？」
「麓の街の市の立つ日に持って行って、馬と交換するんだ」
「お前、まだ、そんな事…」
三峰の部落は、幾重もの尾根と切り立った谷で構成された、大きな洗濯板みたいな地形にある。狩猟に馬は役立たない。
部落の家畜は、乳を出す山羊と、毛を採る羊やヤクが主だ。馬は、織物の搬送用に、肩の立った山岳馬が二頭居るだけ。乗馬には適さない。
「僕は、自分用の騎馬が欲しいんだ」
「…ヤン」
「いいでしょ、族長が空いた厩を使っていいって言ってくれたし、飼料も自分で調達する」
「ヤン、馬を持つのは構わない。だけど、飛べる訳じゃないぞ」
「そんなの、分かんないよ！」
イフルートは仕方なさそうに肩を竦(すく)めて苦笑いした。彼を含めてこの部落の大人は、数の少ない子供に甘い。
ヤンはリーダーに敬意の礼をして、その場を離れた。
分かってる…、あれから五年の歳月が過ぎている。ちょっと年取って物事を知れば、分かって来た事だ。あの青い髪の男の子も女の子も、風の妖精だ。飛べるのは…風の妖精だからだ。
自分は山の猩猩(しょうじょう)に属する種族。同系族で飛べる者はいない。でも、じゃあ、何で、馬を手に入れようとしているかって…？
耳元を風が過(よぎ)った。頭の羽根飾りが揺れる。
「うん、約束したもんな」

自分も飛べる日を目指して、努力し続けるって。
信じるのを止めた時点で約束は消えてしまう。
〈先の事は分からない〉
オレンジの瞳の女の子はそう言ってくれた。
結果なんかどうでもいい。信じ続ける事。次、逢った時、胸を張れる自分で居続ける事。
「それが僕にとって、大切な事なんだ」

～ユウジーン～

「あっ、金鈴花！」
放牧地の陽当たりのいい土手に、明るい黄色の点々が見える。
「今年一番だ。暖かい日が続いたからな」
コバルトブルーの短髪をなびかせ、少年はちょっと目を細めて馬を降下させた。
腰には大小の二刀。胸元に小さな御守り袋。体格はいいが、表情に幼さが残る、蒼の一族の少年。
執務室の御簾を開けると、大机のホルズが立ち上がってこちらに回って来た。
「おお、ジュジュ、どうだ、大丈夫だったか？」
「はい。棘の森の猪殿は、見掛けはゴツいけれど、礼儀さえ欠かさなければ偏屈はしないって…、ノスリ様に教わった通り、気を付けて話をすれば、ちゃんと聞いて貰えました」
少年は頬を上気させて、小机で報告書を書き出した。
最近やっと一人で仕事に出して貰えるようになって、嬉しくて仕方がない様子だ。
「うんうん、よくやったな」
若い者に気さくなホルズだが、この少年には輪を掛けて甘い。子供の頃から手塩に掛けているから尚更なんだろう。
「ま、当然だ。俺の剣の一番弟子だからな」
ノスリが腕捲りを降ろしながら入って来た。
「しかし、もう一人で仕事に出られるとは、最速だな。春に修練所を修了したばっかりだろ？」
「俺に見る目があったのさ」
あの日、風に舞った緋(あか)い羽根を追って執務室に飛び込んだ子供は、成り行きでホルズの助手になった。遊びたい盛りの筈なのに、放課後毎日、生真面目に通って来た。
理由を聞いたら、「何となく…」という、現代っ子らしい答えが返って来た。
まあ、ノスリに剣を教わるという目的もあった。

驚いた事に、ジュジュは今までの弟子の中で一番筋がよかった。隠れた金の卵だったのだ。
「嬉しいね、これで俺もいよいよ楽チン出来るかな？」
「寝ぼけた事言ってないで、ノスリ翁」
「その呼び方はよせ、ホルズ」
「じゃあ御隠居」
「勝手にしてくれ。それよりこいつ、先週名前を貰って、もうジュジュじゃないぞ」
「ああ、そうだった。拝命も最速だったな。えっと……」
「ユゥジーンです、ホルズ様」
少年は、はにかみながら答えた
「そうそう、舌噛みそうな。全く新長殿は凝った名前が好きだから、覚え切れなくて敵わん」
「ちゃんと意味があるんですよ。『羽根の悪魔』って」
「何だそりゃ。ナーガの奴、何だってそんな名前を？」
「自分で頼んだんです。『悪魔』に因んだ名前がいいって。そしたら、風の悪魔『ジーン』から取ってくれたんです」
「いやいや、何で悪魔なんぞ…」
「えと…」
「んん？？」

「ルウシェルと同じになりたかったんでしょ」
　明るい声の女性が、風呂敷包みを抱えて入って来た。長い三つ編みのエノシラだ。あのぽっちゃり体型が嘘みたいに解消され、すっきり女性らしくなっている。
「ルウシェルって、西方の教典で『天から落っこちた悪魔』って意味なんですって。はい、ジーン、繕い物」
「有り難う、エノシラ母さん」
　最近のエノシラは、教官センセが引き取って育てている、親がいない子供達の世話を、ちょくちょく焼いている。ユゥジーンも、そこ出身だ。
「はあ？　西風では子供にそんな名前を付けるのか？」
「西風の里じゃなく、砂の民の習慣ですって。女の子にわざと恐ろしい名前を名乗らせて、悪い魔から守るって」
「へえぇ」
「本当の名前は他にあるけれど、親が誰にも教えず隠しているんですって。ルウも自分の本名は知らないって言っていたわ」
「何それ？　名前の意味なくない？」
「さあ…、でも、考えてみると、名前って不思議ですね。自分のモノなのに、使うのは圧倒的に他人だわ」
　ホルズが鋭く戸口を見咎めた。
「ユゥジーン！　待て！」
　話題の矛先が他所を向いている間に、こっそり逃げ出そうとしていた少年は、憐れホルズに羽交い締めで引き戻された。
「で、何だって？　愛しのルウシェルにあやかって、同じ意味の名前にしたって？　ストレート過ぎるぞ、この現代っ子が！」
　こういう話題は大好物のホルズが、少年の首に腕を回した。
「そんなんじゃないですよ！」
「うん、じゃあ、どんなんだ？」
　ノスリもニコニコと腕組みをして、取っ組み合う二人を、楽しそうに眺めている。
「忘れたくないからですよ」
「…？」
「結局あれから、シドとソラは来るけれど、ルウは一度も来ないじゃないですか」
「ああ…」
　確かに、シドとソラは毎年夏に、数ヵ月手伝いに来てくれるが、ルウシェルはあれきりだ。西風の老人達が長娘を外へやりたがらない…と、二人は言っていた。
「もしかして、もう一生逢わないかもしれない。でも、誰かが俺の名前を呼んでくれれば、俺はあいつの事、忘れないでいられるんです」

「そうか…」
そんなに遠い目をされたら、冷やかし甲斐もない。ホルズも腕を外して少年の肩をポンポン叩いてやった。
「苦労するな、若者」
「ナーガ様は、もうひとつ忘れない名前を付けてくれたのですね…」
エノシラは大机の墨ツボを懐かし気に眺めながら言った。
そう、春には戻ると言っていた羽根の子供も…結局あの後、戻って来なかったのだ……。
「ん…、俺、あいつの事も、忘れたくないから……」

〜フウヤ〜

朝イチの音合わせの時間。
霧深い風露の谷に、一定の音程で様々な音が響き渡る。
今なら皆、音に集中しているから、多少怪しい動きをしても見つからない。
白い猫毛の少年は、小さな風呂敷包みを背負って、山の近くの塔の壁を降りていた。張り出した木の枝を掴み、関を通らずに山の斜面へ辿り着いた。久し振りの柔らかいシダと土の感触。
もう一度風露の部落を振り返る。
ミルク色の霧に包まれた、生まれ育った部落…。
もうすぐ職人のオルグに入る。そうしたら部落を出ちゃいけない身になる。もう子供じゃなくなるから。
風露の民は門外不出の技術を守る為、楽器造りを習い始めた者の外出を禁じている。そうやって不安定な部落は生き延びて来たのだ。皆それで納得し、小さな部落で世界に広がる音色を削り出しながら、一生を送る。
少年もその一員でいるつもりだった。
「ごめん、お姉ちゃん……」

「フウヤ?!」
尾根の裸地を歩く少年の前に、深緑の草の馬が降りて来た。
しまった、このヒトの来る日だったか…。上空からだと隠れようがない。
「どうしたの、確かもう成人だよね?。部落を出てはいけないんじゃなかったっけ?」
馬上には、長い髪の蒼の一族の男性。曇り一つない額に、翡翠の飾りが揺れる。いつ見ても綺麗なヒトだなあ…と、ボォッと思った。
「えと…、ナーガ義兄様、どうしても行きたい所があるの」
少年はまだ呼び慣れない名をおずおず口にして、顔を上げた。

「見なかった事にして貰えない？」

風露の部落より数里離れた、山の麓の川沿いの部落。川の浅瀬に桟橋が作られ、女達が布を晒している。

それらを見渡せる崖の上に、ナーガとフウヤが立っていた。

「『川柳の部族』と呼ばれる部落はここだけだよ」

「ありがと、義兄様」

あまり世話になりたくなかったのだが、つい、馬で送ってあげるという言葉に甘えてしまった。

「フウヤが会いたいヒトって、あの中にいるかい？」

「……」

「遠過ぎるかい？」

「顔を知らないんです」

「？？」

ナーガは怪訝な顔をした。てっきり山で見かけた女の子に一目惚れでもして、会いに来たかったんだろうと思ったのだ。

「顔も知らないって？」

「…はい」

「えと？　誰なの？　フウヤの？」

「……おかあさん……」

「えっ？」

フウヤは、話す事にした。下手にごまかさない方がいい。このヒトなら分かってくれるだろう。

「えっと…、ナーガ義兄様に言っていなかったけれど、僕のおかあさん、風露のヒトじゃないの」

「…そう…」

ナーガは言葉少なに頷(うなず)いた。地形も習慣も特殊な風露の部落に、他所から嫁ぐのはとても困難だ。そういう事だってあるんだろう…。

「じゃあ、フウリとは異母兄弟なんだ？」

「ううん」

フウヤは首を振って口の中で小さく言った。

「おとうさんも違うの…」

「……」

ナーガは黙ってフウヤを見下ろした。少しの無言の時間が流れる。

「あの」

「うん」

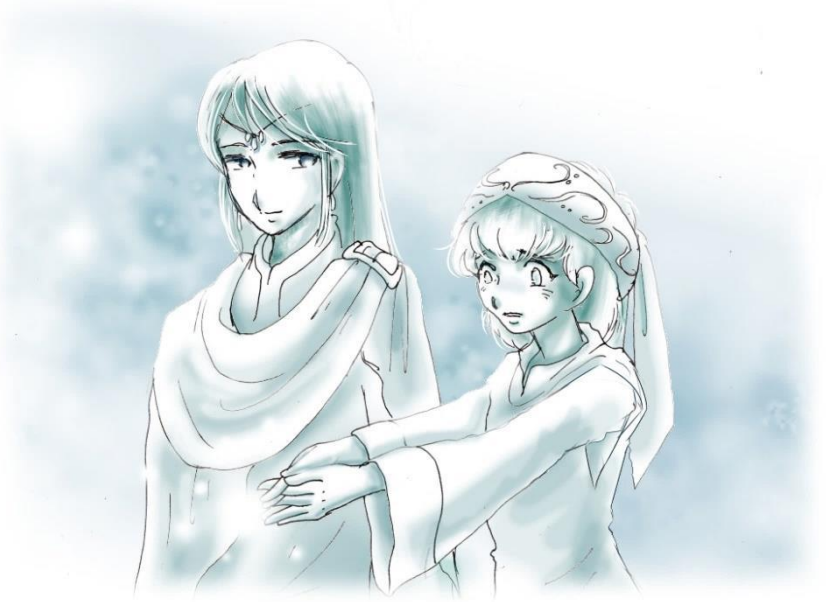
「僕のおかあさん、何かの理由で、お腹の子供と一緒に、神様の所へ行こうと、山をさ迷ってたって。雨の日に…」

「……」

「そんで、風露の部落に助けられて、大人の人達で色々、色々

話し合って、僕は風露の子になったの」
「……そうか…」
「夕べ、聞いたの。お姉ちゃんに」
「……」

「ちょっとお待ち」
ナーガは小刀を取り出した。
「左手を出して。少し我慢しなさい」
少年の薬指の先を小刀で突くと、赤い血の玉が膨らんだ。その指を、右手の薬指と血で張り付ける。ナーガが呪文を唱えると、重ねた両手がすうっと動いて、前に突き出された。
「君の血が呼ぶのは、あのヒトだね」
目の前のくっ付いた薬指の指す先に、一人の女性が、ひときわ鮮やかな布を川に浸していた。
猫みたいな釣り目が自分と生き写しの、色白な女性。
フウヤは口をキュッと結んで、その女性を見つめた。
「優しそうなヒトだね」
「うん…」
「それに、きっともう、神様の所へ行こうとはしなさそうだね」
女性の腰には、小さい子供が二人張り付いていた。女性と同じ髪色の、猫目の子供。



「うん…」
「会いたいかい？」
「ううん、姿を見たかっただけ」
「そう」
　ナーガは少年の両肩に手を置いた。
「じゃあ、帰ろうか。僕の急な用事を手伝って貰ったって、ラゥ老師に言っておくよ」

「ううん」
　フウヤは首を横に振った。
「フウヤ？」
「義兄様、もし、義兄様が、楽器造りをしなきゃならなくなったら、どうする？」
「…？　無理だろう？　僕、そんな音感ない」
「僕もそう。全く音が分からない」
「……」
「昨日、それで荒れたの。皆が小さい時から当たり前にやっている調律が、全く出来なくて。そしたらお姉ちゃんが、僕の出自を教えてくれたの」
「フウヤ…」
「お姉ちゃんは、出来なくて当たり前だから、悩まなくていいのよ、って言ってくれたの。音が分からなくても、漆とか彫金とか、細工専門の職人になる道があるって」
「うん、フウヤ、その通りだよ」
「ああ、ナーガ義兄様、僕がショックを受けたと思っているの？　違う。僕が風露の血を引いていないって分かった瞬間…、まるで、霧が晴れたように、目の前に世界が広がったんだ」
「……」
「楽器造りの職人になる道は、僕に取って真っ白な霧に閉ざされていた。でも、思い切って視線を上げたら、他の道が一杯伸びていた。そう、あの時に似ている。シンリィを捜して草の馬で飛んだ時。怖かったけれど、生まれて初めて、胸が弾けそうにドキドキしたんだ」
　少年は、はっきりナーガに正面向いた。
「一度この気持ちを持ってしまったら、もう風露へは戻れない。目の前に大きな世界がある。僕は僕の可能性を探して、自分の意思で旅立つ事にしたんだ」

〜リリ〜

「それで…？」
「今日は、近隣の懇意の部族に預かって貰っている。明日、蒼

の里へ連れて行くよ」
「そう…」
自宅の工房の窓から、暗がりの山の斜面を見やって、フウリはホゥッと嘆息した。
「何となく、そうなる気はしていたのだけれど…」

カンテラのオレンジに照らされた妻を、ナーガは黙って見つめる。
「昔、私は漠然と、外の世界に憧れた。でも、あの子は自分の血と向き合って、もっと現実的に考えているんだわ」
「さっき、ノスリと鷹の手紙でやりとりをした。修練所の教官が面倒見てくれるって。責任感のある真面目なヒトだよ。一人でどこかへ行ってしまうよりいいでしょう。今日、僕に遇わなかったら、そうしていた感じだった」
「…そう…、そうね…」
フウリは目を伏せて頷いた。
「まず君の考えを聞いてから、ラゥ老師の所へ話しに行こうと思って」
「いえ、老師は通さない方がいいでしょう。お困りになるわ」
「しかし…」
「何となく、居なくなった…でいいんです。皆も分かってくれます」
「……」
フウヤがこの部落へ引き取られた時から、皆、何となく予見していたのだろう。風露の一員であるのに必需な能力のない子供…。フウリは、万に一つ、フウヤに部落での道が開ける事を望んでいたのだろうが。
「あの子の事、宜しくお願いします」
頭を下げる妻の肩に、ナーガはそっと手を掛けた。
「大丈夫、フウヤはあの年とは思えない程、凄く大人びてしっかりしているし…」
そこまで言って、ふうっと遠い目になった。
「ナーガ殿?」
「あ、いえ、そういえば、同じ年だったなあって」
「…シンリィ?」
「ええ…」
フウリは黙って自分の二胡の先端をなぞった。あの時貰った人形の破片は、ナーガの二胡の立ち駒に使ったが、残った木端を細工して、自分の二胡の端飾りに埋めてみた。
そのせいか、二人の奏(かなで)は本当に素直に響き合う。
…不思議な子供だった…。
あの羽根の子供に思いを馳せている時、このヒトの心はここ

には無い。そんな時、フウリは、気長に待つ。
それは仕方のない事だもの……。

ふと、ナーガの心がこちらに戻って来た。
すいっと立って、戸口を開ける。
「あっ！」
戸口の外壁に背中をもたせて立っていた女の子が、小さく声を上げた。
「あの…、ろーしさまが、ちゃんと挨拶しに行きなさいって」
紫の前髪の下のビー玉みたいな瞳を上目使いにして、子供はモゾモゾと口ごもった。
「…リリ？」
ナーガは目を丸くした。
「びっくりした。本当にリリか？　リリ…だよなあ」
「先月より頭一つも背が伸びたんですよ」
フウリは呆れて娘の手を引っ張った。
「ちゃんと挨拶…って、当たり前でしょう？。お父様がみえているというのに、どこへ行っていたの？」
リリと呼ばれた女の子は、口をへの字に曲げて部屋に入った。
パヤパヤ広がる猫っ毛は、前半分がフウリ譲りの淡い紫、後半分は蒼の一族の空色、後頭部はナーガと同じ藍色だ。それが爆発したみたいに広がって背中を覆っているから、まるでカラフルなヤマアラシだ。
「まあまあ」
ナーガは娘の目の高さまで屈んだ。
「たまにしか会えないからね。今日も元気なリリの顔が見られて嬉しいよ」
「……」
「リリ！」
「……こんにちは…」
フウリに促されて挨拶したが、女の子の表情は固まったままだ。
「今日は何をしていたの？」
「……別に、何も…」
月に一度会えるか会えないかの父親じゃ、他人行儀なのは仕方ないのかもしれないが、もうちょっと懐いて欲しいって思うのは贅沢なんだろうか？　自分の子供時代、氷の神殿で、父様が来たっていうと、大騒ぎでユユと膝の上を争ったモンだったけどなあ…。
微妙にガックリするナーガの横で、フウリは申し訳ない思いで肩をすぼめた。
でも、この娘は、蒼の妖精なのだ。

かしこまって父の前で座る娘は、数えで四つの筈なんだが、言葉も手足もしっかりして、パッと見、七つか八つに見える。風露の子は、こんな成長の仕方はしない。

リリが誕生した時、蒼の里から賑やかな大きいヒトが二人来て、大喜びで祝福してくれた。就学年になったら、里へやる事になっている。寂しいけれど、フウヤと比べたら、行った先で望んで待たれているこの子は、幸せなんだろう。

「…あたし、お友達と約束しているの」

「リリ、お友達とはいつでも会えるでしょう?」

「ううん、ここを出ちゃったら、もう会えない!」

「……」

「いいよ、リリの言う通りだ。友達を大切にしなさい」

ナーガは優しく言ったが、リリは最後まで固い表情のまま、お辞儀してツタを滑って行った。

「ごめんなさい…」

「謝らなくていいよ。あの子を健やかに育ててくれている。感謝しているよ」

そう言いながらも、ナーガは複雑な気分だった。

シンリィといい、リリといい、自分は子供を緊張させる何かを持っているんだろうか?

「こちらの子も、リリみたいに元気で生まれてくれますように」

気持ちを切り替えるように、妻のお腹に手をやって、ナーガは目を閉じた。

「この子は風露の子になる。そういう風になっているモノなんだよ」

フウリは心を見透かされて、ちょっと俯(うつむ)いた。どちらも大切な自分の子供なんだけれど、風露の子供と、蒼の妖精の子供…、二人いたら、ここで同じように育てるのは難しい。

リリはこのヒトの側へ行った方が、幸せになれるんだわ…。

風露を出て、フウヤを預けた部落へ向かいながら、ナーガは考え込んでいた。

リリの成長の早さに、不安感が否めないのだ。幾ら蒼の妖精の子供でも、あの子は異常だ…、早過ぎる。

子供の成長が極端に早い例…。その前例を一つだけ知っている。自分の叔父…二代前の長。あのヒトも、子供時代を一気に走り抜けたという。

それは必要だったからだ。モンゴル帝国が産声をあげる前の混沌の時代。人間界も人外界も荒れに荒れ、蒼の里も多くの犠牲を出した…そんな時代。長の血を持つ者として、一刻も早く

大人になる必要があったのだ。
今、また、微かにではあるが、平穏を揺らす影が近付いている。だから、里でも若い者に早目に名前を与えて、成人を促している。
「リリ…」
生まれながらに未来の不安を背負ってしまった娘。
「僕が、何があっても、お前を護る！」
護り切れなくて後悔する事は、二度としない…！

～ルウシェル～

地平が霞んで波打つ。
「砂嵐が来る」
粕鹿毛の鞍上のオレンジの瞳の少女は、首のストールを鼻の上まで引き上げ、後方に声を掛けた。
「狩りは終いだ。部落へ戻るぞ」
「嬢(じょう!)」
殿(しんがり)を務めていた騎馬の青年が叫んだ。
「砂の魔だ！」
遠くで砂が盛り上がり、凄い早さでこちらに向かって来る。一匹じゃない。砂嵐と挟み撃ちの形になる。
「ふん！」
少女は腰の剣に手を掛けた。
「お前ら、南東へ走れ。流砂の谷を迂回しても、今なら砂嵐から逃げ切れる」
「嬢、我々も！」
剣を抜き掛ける灰色の若者達を、少女は制した。
「今日は、護るべき者がいるだろう」
「あ…」
この日は、狩りが初めての子供が二人、同道していた。不安そうに肩を竦めて、歯をカチカチ震わせている。少女は子供らに近付いて、今一度ストールを引き下げ、泣きそうな幼顔を覗き込んだ。
「馬のタテガミをしっかり握って死ぬ気で皆に着いて行け。お前らは誇り高い砂の民だ。目を上げろ！」
「は、はい!!」
子供は電気に打たれたみたいにピシリと背筋を伸ばした。
「行け！」
「おぅ、嬢も気を付けて！」
「案ずるな！　子分を守るのは親分の役目だ！」
砂の民の若者達は、年若い者を囲む陣形で駆け去った。
少女は迫り来る砂の魔に向き直って、抜刀した。柄に七宝の

花模様の、白銀の剣。
「ふふん！」
砂が跳ね上がり、数匹の巨大蠍(サソリ)が、空中に踊った。
「出会った事を不運と思え!!　私は砂の民のルウシェル!!」
砂嵐をやり過ごしていると、夜になってしまった。剣の汚(けが)れを砂で落として、星を見ながら夜の砂漠を東へ向かう。
「あ…」
見馴れた地形があった。あの崖を飛び降りれば、結界を越えて西風の里だ。母者もいる。
「……」
ルウシェルは目を逸らせて通り過ぎた。母者には会いたいけれど、今の自分は西風とは立ち位置を遠くしている。

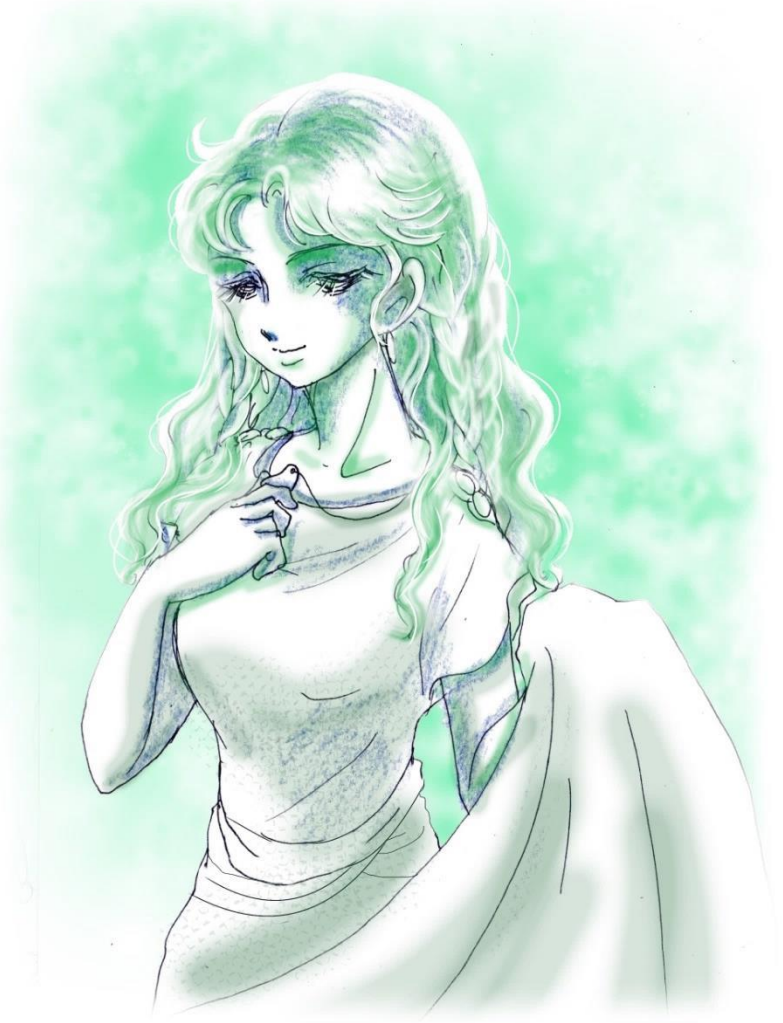
五年前…、北の草原で多くの事を学んで、シドとソラと共に帰還したルウを出迎えたのは、目の下に隈を作って疲れた笑みを浮かべた、母のモエギだった。三人のいない間に、西風の里がおかしな事になっていたのだ。
もともと西風の里は、頑固な老人達の発言力が強過ぎるのがトラブルの種だった。子供達が遥かな大空へ駆け上がって行こうとするのを、百万年前の位置で岩のようにガンと動かない老人が引っ張り止めているのが、西風の里だ。
時代錯誤の見当外れな老人達と、実際に里を運営している若者達との間の溝を、長のモエギが穏やかに埋めているのだが、それがいつも老人達の勘に障っていた。
ルウのいない間に、その老人達の頂である長老が、病で動けなくなった。残った老人達は、勝手に不安を募らせた。モエギがこの期に、老人達の権力を奪いに掛かるのではないか、と。
「そんな訳ないじゃないですか」
シドとソラは呆れて唇を尖らせた。
「そんなつもりなら、蒼の里の常駐者がいる時に、とっくにやっていますって」
キッパリした性格のモエギだが、背中合わせの優しさがある。思い切った改革をやらかすと、老人達が居場所と生き甲斐を失う事を知っていた。
老人達はどんどん意固地になって、権力の確認の為に言い掛かりのような無理難題を吹っ掛けては、モエギを困らせていた。
「母者、もう、石頭の老人達の言う事なんか、無視していいじゃないか」
「ああ、だけれど、ルウ…」
モエギは朝夕の風を流しながら、娘に説いた。

「私は西風の長だ。長は切り捨ててはいけない。新しいも古いも、良いも悪いも、里の全てを受け止めなければ、風が流せない」
そんなモエギをして、狼狽させる出来事が、翌年起こった。
翌年の夏…、ルウシェルは、再び蒼の里へ留学するのを楽しみに、準備していた。
ある朝、老人達がかしこまって押し掛けて来た。
「元老院で決定しました。秋の誕生日には婚礼の儀を上げて落ち着いて頂きます」
「…は？　何の？　誰の？」
「貴方様の、ですよ」
＊＊＊
「冗談じゃない!!」
「勿論冗談ではありません。ついこの間までは、皆、その位の歳で、普通に身を固めておりました」
老人達にしたら、この娘にこれ以上賢くなられては困るのだろう。まだ幼い内に自分達の手中に収めて置きたいのだ。
「は、早過ぎる！　ルウシェルは秋の誕生日でやっと十一歳だぞ！」
さすがにモエギも抗議した。
「放って置くと、貴方様のように血を薄める羽目になりかねません」
「……!!」
それを言われると、モエギは詰まる。
西風の長には、風を流さねばならない理(ことわり)がある。長の能力を絶やす訳に行かないのは、確かなのだ。
老人達は勝手にサクサク話を進めた。婚礼相手は、長の血筋に近い何人かが候補に上げられたが、ルウと同年代の者はいなかった。老人達に近しい、話した事もないオジサンばかり。
そして老人達は、それぞれ自分の息の掛かった者をと、陰険な蹴落とし合いを始めた。
ルウシェルは、母の着物の袖をギュッと握って黙っていた。この事に関して我を通すと母を困らせると、小さい時から得心していたつもりだった。
自暴自棄で塞ぎ込んでいたそんな折り、先に蒼の里へ行っていたシドとソラが、ひょんと戻って来た。
「久し振りに会ったら、何ショボくれてるんですか」
「そんな顔、貴方らしくないですよ」
後で、モエギが手紙を書いたと知った。
二人は気分転換と称して、ルウを紫の丘に連れ出した。そこ

に待っていたのは、久し振りの父親だった。
「親父殿が孫娘の顔が見たいとさ」
そのまま強引に砂の民の部落に拉致された。
大人達の間で、喧々囂々(けんけんごうごう)色々あったようだが、祖父…砂の民の総領殿に、
「子供が余計な心配するでない!!」
と一喝された。
これも後で知った事だが、総領殿が泥を被ってくれた。孫娘を側に置きたがる聞き分けのない我が儘爺さんを演じて、一人で悪役になってくれたのだ。

…そんな訳で、ルウシェルは今、砂の民の部落で生活している。もう四年目だが、西風の里よりずっと馴染んでいる。
ハトゥンの昔の子分の子供達とは、すぐに打ち解けた。みんな『様』は付けないで、ルウとか嬢(じょう)とか呼んでくれる。父の人徳のお陰もあるけれど、西風のおかしな空気のない場所では、ルウはすこぶる素敵な子供なのだ。
時々砂漠で父と一緒に母に会う。
「連中、性懲りもなく私に縁談を持って来るんだ。〈漆黒の豪快坊っちゃん〉を敵に回してもいいのなら、って言うと黙るけれど」
そう言って父と笑い合うけれど、目の下のやつれが、里での重苦しい日々を物語っていた。
両親や祖父がどれだけ自分を愛してくれているか、身に染みた。皆を護りたかった自分が、結局多くの者に護られているという事も、思い知った。
だから、蒼の里へ留学に行ってもいいって言われたけれど、砂の民のルウシェルとして、この砂漠に生きようと思った。祖父の側で孫娘でいられるのも、一生で今だけな気がした。

蒼の里の同い年のジュジュが、留学出来ないルウの為に、修練所で学んだ事を書き留めた書簡を、毎年シドとソラに託してくれた。冬の間はソラが勉強を教えに通って来てくれた。結構厳しい先生だった。
蒼の里には自分の身の上は伝えないよう頼んだ。聞けばナーガのおっさんは、何とかしようと飛んで来るだろう。でも、ここは自分で頑張るべき所だと思う。自分をしっかり成長させれば、きっと道は開ける。
「それに……」
ルウは砂漠の星空を見上げた。
「ナーガに合わす顔がない…」
ストールを外して砂を落とすと、成長したたおやかな曲線の



肩に、碧緑の髪が流れた。
胸元に、金鎖に通したピンクの平たい石。
「護るって言ったのに……」

～シンリィ～

五年前…。蒼の里から旅して来たシンリィは、結局西風の里に辿り着かなかった…。
西風の里のホンの少し手前…、三日月型の湖の畔の森で、シドとソラ、それにルウシェルと、四人で夜営していた。
妙に生暖かい夜だった。
三峰を出た時から塞ぎ込みがちなシンリィだったが、その森に入った時から何だか変だった。キョロキョロと落ち着きがなくなった。
「どうしたんだ？　明日は西風の里に着くから、不安なのか？心配しなくて大丈夫だよ。みんな、君のお母さんが大好きだったんだから」
「お父さんもそこそこにね」
シドとソラは故郷が近付いた安堵から、あまり心配していなかった。

夜半、天幕の下で寝ていたシンリィが起き出して来た。
「眠れないの？」
焚き火番のシドはさして気に止めず、薪を裏返しながら聞いた。子供は羽根の先を弄りながらキョロキョロして、繁みの方へ歩きかけた。
「シンリィ？　寝とかないと、明日キツいよ」
「どした？」
ルウも、起き出して来た。
「シンリィが落ち着かないんです。でも馬達も静かだし、心配ないと思うんですが」
「ふうん」
ルウはシンリィの手を握った。特に危険な感じは伝わって来ない。
「いいよ、ちょちょっと散歩して来る。ソラが寝ているし、シドは番していて」
ルウはそう言うと、手を繋いだまま、シンリィの行きたい方へ歩き出した。
明日からの新しい生活に不安を感じているのかもしれない。ちょっと歩いて、この子の気が済めばそれでいい。
……それが、シンリィと手を繋いだ最後だった…。

森をかき分け、湖の浜に出た。
「ほら、三日月が湖に映ってる……？？…!!」
言いかけて、言葉がつまった。
ムーンロードの水際に、何か大きな生き物がうずくまっているのだ。
シンリィが手を離して、揺れながら駆け寄った。
「おい、シンリィ！　迂闊に近寄るな！」
そう言いながら後を追うルウは、砂利の上の横たわるソレを見て、息を呑んだ。
牛程もある、真っ赤な狼…!!

ザクザクという足音に、赤い狼はダルそうに身震いして首を上げた。よく見ると、狼の周りの空間が灰色に揺らめいている。
「へ…、目敏(めざと)いガキが。いや、その羽根が俺様をここへ呼んだのか。…お節介め！」
憎まれ口を叩きながら立ち上がろうとするが、足に力が入らない様子だ。
「…!!」
ルウは吐き気を呑み込んだ。狼の横っ腹に真っ黒な穴が空いて、黒いモノがドクドクと流れ出しているのだ。
「お、おい、お前、動いちゃ駄目だ、今…」

「俺様に指図するな!!」
赤い狼は、どこにそんな力がと思う程肩を怒らせて、歯を剥いて唸った。身体中から炎が立ち上がる。
「…!!」
背筋が硬直して後退りするルウの前に、シンリィが羽根を広げて立ち塞がった。
「…へ…え…」
狼は口の端から炎を吐きながらよろめき、前肢を広げて踏ん張った。
「ちょっと見ない間に、随分なナイト様になったじゃねぇか？　え？　羽根のチビ助よぉ」
子供は、銀の眼を凝視したまま、一歩前に踏み出す。
「…俺様に、構うな…」
言葉と裏腹に、声に力がなくなり、狼は水音をさせて倒れた。
シンリィは駆け寄りながら自分の羽根を引っ張って、羽毛でない、長い羽根をわし掴みにして引き抜いた。ブチブチと生々しい音がした。
「止せ……」
狼は目を閉じたまま掠(かす)れた声で呟いたが、シンリィは構わず側まで行って、黒い傷に羽根を押し付けた。
ルウは金縛りにあったように動けなかった。彼女の本能が、近付いちゃいけないモノだと教えていた。
でも…シンリィを…シンリィを、護らなきゃ……。
少しして、狼がうっすら目を開けた。黒い穴から流れる液体は止まっている。シンリィの手から、消し炭みたいな黒くからびた羽根が落ちた。
「へ…！」
狼は横たわったまま、痙攣するように吐き捨てた。
「余計な事を!!　それで救ったつもりか!!」
「そんな言い草ないだろ…」
ルウが切なそうに言った。
「お前とは話をしていない！」
狼は口から炎を漏らしながら歯ぎしりした。
「ついでに言うと、お前にも話していない！」
横にいるシンリィも睨みつけた。
「その羽根だ！　忌々しい、あの小娘！　まだ、俺様を助けられる気でいるのか?!　傲慢だ！　余計なお世話だ！」
＊＊＊
「…??」
何を言っているのか、ルウには分からない。
だけれどこの狼が、自分の命より…この世の何より、プライ

ドが大事なのは、何となく分かった。
「なあ、あんた…」
狼は、黙れ！　とばかりに喉を唸らせたが、ルウは言葉を続けた。
「恩を着せられるのが嫌なら、代わりに教えてくれないか？　私ら、無知だから、あんたの言ってる事、さっぱり分からない」
「へへ、そうだろうさ」
狼は少し落ち着いて、銀の瞳を滑らせてシンリィを見据えた。
「イイ事を教えてやる。お前さんにとって大切な事…」
そう言って、ゆるゆる首を上げると、口からホゥと火の玉を吐いた。火の玉はゆらりと上昇して、湖に何かを映し出した。

それは、どこか大きな建物の中の風景だった。
太い柱が奥までずっと続いている、壁も床も鏡みたいな、長い廊下。突き当たりに両開きの扉。
水に泥を溶いたようなおどろおどろしい灰色が、扉の隙間から染み出して来る。物凄い邪悪な気配。
「駄目だ!!　その扉を開いたら!!」
ルウは直感で叫んだ。
しかし、邪悪が爆発するように扉を跳ね開け、灰色が映像一杯に広がった。
爆風の中に、塵みたいな白いモノが混ざっている。羽根だ。シンリィの緋(あか)い羽根とは違う、純白の、無数の羽根……。
「あ・・あ・あ・あ・・・・」
シンリィが絞り出すように声を発した。
狼はシンリィの様子を横目で見て、フゥッと火の玉を吹き消した。
「…お前さんのその羽根が、これから起こる事をお前に教える為に、俺様をここへ導いたのさ。だけれど、俺様に出来るのはここまでだ。何故なら俺は、『あっち側』の存在だからだ」
子供は瞳孔を大きく開いて赤い狼を見た。
「後はお前次第だ。平凡な蒼の妖精の子供でいたって、誰も責めない。その羽根もな」
「じゃあ、何で今のを見せた?!」
喋らないシンリィに代わって、ルウが叫んだ。
「遠回しに、シンリィに何とかしろって言ってるんじゃないか！　そうやって、みんなこの子に押し付けて…!!」
振り向いたシンリィの咎めるような目に、ルウは言葉を途切れさせた。
「シンリィ…」

「ふん…」
狼は脱力して、頭を水の中に落とした。
「勘違いすんな。こいつに宛になるカなどあるものか。何も知らないこんなガキ・・――よせ!!」
シンリィがまた羽根を引き抜こうとするのを、狼が牙を剥いて制した。
「これ以上借りを作らせるな!!」
シンリィは素直に止まった。
しかし、狼の側を離れなかった。
羽根が狼をここへ導いたのは、シンリィに予言を告げさせる為だけじゃない。彼の怪我を癒してあげたかったんじゃないのか？　何となくそれは分かった。
そう思っても、ルウはどうしても狼に近寄れなかった。狼だけじゃなく、その周りの灰色の空気も恐ろしくて、足がこわばって動かないのだ。

少しして、狼は薄目を開け、側で動かないシンリィを見た。
「ふふ、お前はいいな。ベタベタお願いする口も、おためごかしの礼を言う口もない」
狼は目を細めて口の両端を上げ、ヨロヨロと立ち上がった。
「ご褒美だ。ちょっとの間だけ、道を開けといてやる」

そう言うといきなり立ち上がり、すべての力を振り絞って真上へ跳んだ。
「あっ…!!」
赤い姿は一瞬で消え、そこの空間が、水の波紋のように広がった。
シンリィが慌てた様子で右手を上げた。
灌木の繁みにバキバキいう足音が近付いて来る。白蓬(しろよもぎ)が駆けて来る音だ。
ルウは渾身の力を振り絞って、足の戒めを振りほどいた。
「シンリィ！　明日は西風の里だ！　母者もあんたに会えるのを楽しみにしている！　シンリィ？!!」
しかしシンリィは、差し出されたルウの手を、いつものように握らなかった。代わりに、首に下げたネックレスからピンクの石を引き千切ってルウの手に押し付け、白蓬に飛び乗った。
「シンリィ!!」
子供は羽根を広げて馬と共に波紋へ向けて跳んだ。
「行くんなら私も行く!!　いつだって一緒だったろ!!」
馬上の子供は目を伏せた。初めてルウに示す、拒絶。
「シンリィ――!!」
湖に駆け入るルウを、白蓬を追って来たシドとソラがしがみ付いて止めた。

見上げる三人に、羽根の子供は中天の昴(すばる)を指差した。そして、もう、一度も振り向かないで、空中の水の波紋の中へ消えた。

＊＊＊

ルウシェルは泣きもしないで湖畔に佇んでいた。

本当に、何が何だか分からない。だけれど、シンリィのやる事には、いつもちゃんと意味があった。いつだって後になって、ちゃんと分かったんだ。だから……信じる事にした。

シドとソラは、ルウより素直に受け入れた。

ヒトの持つモノを持たず、ヒトの持たぬモノを背負ったあの子は、自分達に見えない物を見て、聞こえない声を聞いていたんだ。それは出逢った時から分かっていた気がする。

ナーガも、こちらが拍子抜けする位、あっさり受け入れた。

ルウが一生懸命書いた手紙に、穏やかな返事が来た。

〈あの子にはあの子の生き方がある。ルウが気に病む事はない。ただ、信じて待っていてやって欲しい〉…と……。

「二月生まれって言っていたから、もう十二だな。西風の里だと、帯剣の年だぞ、なぁ、シンリィ…」

五年前の事に思いを馳せながら、十四のルウは星を見上げた。

真上に牡牛座の六連星(むつらぼし)。あの時、小さいシンリィが指差した星。

里へ戻ってから、シドとソラと一緒に調べてみた。六つの霞んだ星が一塊になった星雲。月の女神に仕える姉妹が星になった昔話……その位しか分からなかった。

「あっ?!」

背後に殺気を感じた。馬を跳ばそうとしたが、一瞬遅かった。

後ろから、砂と一緒に大きな衝撃波が襲って来た。

「さっきの蠍の残党?!」

馬から投げ出されたルウは辺りを見回したが、何も見えない。

ただ、不穏な空気が満ち満ちている。跳び蜥蜴とも違う。初めて感じる気配?。

「なに?」

いきなり目の前に小さい点が出来、瞬時に広がって灰色の泥みたいな渦巻きになった。

見覚えがある。あの湖の畔で、赤い獣を包んでいた邪気!、獣に見せられた映像の、扉の向こうからも染み出ていた。

背筋に、あの時と同じ悪寒が走った。どうしたらいい?!

そうだ! 昔、ナーガに教わった破邪の呪文! 使った事ないけれど…。

ルウは力を振り絞って剣を抜き、一生懸命呪符を唱えた。し

かし呪文が未熟なんだろう、破邪はまったく効かない。
灰色の空気が四方から波のように押し寄せて、何も見えなくなった。

「・・？!!」
何で、そこに、自分がいるんだ？
灰色の渦の中に、髪を千々(ちぢ)に乱して、ゆっくり廻るオレンジの瞳の少女がいた。自分なのに、ゾッとする蒼白な顔。紫の唇を歪めて、振り絞るように叫んでいる。
〈――キライだ――!!　母者も、ソラもシドも――!!〉
「な、何で…？」
思わず問い掛けてしまった…自分に…。間抜けな感じだ。
〈――母者は私を守ってくれなかった――。ソラもシドも、所詮は他人事なんだ。自分達だけ、いそいそと蒼の里へ行ってしまって――〉
「そんな…そんな事言うな！　皆私を大切にしてくれている！」
〈――嘘だ、見せかけだけだ！　本当に大切なら、もっともっと大事にしてくれなくちゃ嫌だ！　私はこんなに皆を大事にして、一生懸命、明るく振る舞っているのに――〉
「・そ・そん・な・・・」
〈――シンリィもキライ！　私を捨てた！　私を捨てた――!〉

ルウは身体中に鳥肌が立った。
これが、砂漠の地霊が化けたマヤカシのデタラメならいい。だけれど、もし、これが本当の自分だったら…。護りたい筈の周囲に、自分はこんなにも依存しているのか？
このマボロシを否定する力を、ルウは持っていなかった。こうして言葉で突き付けられると、思い当たってしまうのだ。視界は自分の姿と共に歪んで、判断する力を吸い取って行った。
――寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい……。
――独り、独り、独りぼっち……。
薄れる意識の中で、馬の蹄の音を聞いた気がした。

〈〈〈――キィン――!〉〉〉
全てを打ち破る澄んだ音。
首のピンクの石が激しく光って、ブルンと震えた。そして、辺り一面、翡翠色の光に満ちる。
「ああ……」
光は柔らかくルウの心を暖めた。昔、シンリィと手を握っていた時みたいな暖かさ。手を握られている感覚はないけれど、強い力で身体が引き上げられるのが分かった。

・・・・・・・・・

目を上げると、夜の静寂の砂漠だった。

灰色も翡翠色ももう見えず、月光の青い光に風紋が影を落とすばかりだ。

「はあ……」

凍える肩を抱きながら立ち上がったルウは、違和感を感じて、握り締めていた拳を開いた。

「？!!」

ひとひらの緋い羽毛!!

慌てて辺りを見回す。離れた場所の空中が水の波紋のように揺らめいた・・・気がした。一瞬だったから分からない。しかしルウシェルは確信を持った。

「シンリィ……」

呼び掛けは、独り言のように砂に吸い込まれた。

シンリィだ、確かに……シンリィ・ファ!!

茫然と立ち尽くす頭に、一つの事実が鮮明に浮かび上がる。

シンリィが来てくれた。自分のピンチを、助けに来てくれたんだ。私は、捨てられたんじゃない。シンリィは、ちゃんと私を見ていてくれた!!

「シンリィ……シンリィ、ありがと……」

会ってくれなかったのは、何か、後になって分かる理由があるに違いない。大丈夫、シンリィだもの…。

彼の時間も進んでいるのだろうか？

「背も伸びたか？　もう羽根が重くて引っくり返る事、なくなったか？」

オレンジの瞳の少女はまた独り呟いて、馬に跨がった。

信じていれば、逢える。今こうして、近くまで寄れたじゃないか。

いつか、また、手を繋いで心通わせられる日が、きっと来る。自分に今出来る事は、物怖じなく手を繋げる、恥ずかしくない自分で居続ける事だ。

＊＊＊

風出流山の神殿。

万年雪の山にだって、ちゃんと春は来る。

蒼の狼は、白い羽根を春の風に揺らしながら、遠く麓の森の黄色い丘を眺めていた。

「去年より増えたわ…」

ナーガが、ツバクロの指輪を埋めた場所に植えた金鈴花。もうここを離れる事の出来ない自分の、ささやかな楽しみ。

ふと、斜め後ろに気配がした。

雪原の端の凍土の窪地…、そこには、五年前に積んだ氷のケルンがある。
今しがた誰か居たように、ケルンの上に緋色の羽毛が舞っていた。
今度は背後に気配が移る。
振り向くと、神殿の階段の端っこに、水底のような丸窓が開いていた。
「あら…」
丸窓から階段の手すりに、ぽんと何か投げられた。
「…なあに?」
丸窓はすぐに閉じて消え、狼は近寄ってそれを手にとった。
黄金色の、一輪の金鈴花(シンリィファ)…。
「まあ、ありがとう」
丸窓のあった場所に、狼は静かに話し掛けた。
「次は、お顔を見せて下さいね、…シンリィや…」

〜　Ⅱへ　〜